

エレミヤ書9章23－24節 「キリスト者の誇り」

1A 誇ってはならないこと 23

1B 知恵

2B 力

3B 富

2A 主を知ること 24

1B 恵み(慈愛)

2B 公義

3B 正義

本文

エレミヤ書の聖書通読の学びは、先週で8章まで来ました。今日は9－11章を午後礼拝で一節ずつ読んでいきたいと思いますが、今朝は9章23-24節に注目したいと思います。「23 主はこう仰せられる。「知恵ある者は自分の知恵を誇るな。つわものは自分の強さを誇るな。富む者は自分の富を誇るな。24 誇る者は、ただ、これを誇れ。悟りを得て、わたしを知っていることを。わたしは主であって、地に恵みと公義と正義を行なう者であり、わたしがこれらのことを喜ぶからだ。…主の御告げ。…」

ここの箇所は、7章から始まった、主の宮の門での説教の最後の部分になります。今、エルサレムは、強大なバビロンの脅威を受けています。けれども、彼らは主の宮がここにあり、だからここに主がおられるから私たちはバビロンから救われる、と信じていました。けれども、エレミヤは「それはおかしい」と言いました。確かに、あなたがたが正しいことを行なっているならば、主がここにおられるでしょう。けれども、ただ主の宮があるからということならば、あなたがたはエルサレムから追い出されてしまう、と警告しました。こうやってエレミヤは預言を行なったのですが、その言葉を聞いて彼らは、いろいろなことを言い始めました。「あなたは、何もこの国の状況について分かっていない。」という専門知識が足りないかのように話す意見があります。「何を言っているのだ、我々はエジプトとの外交で、軍事的にもバビロンによって守られる。」と反論する人もいました。そして、「我々には、金がある。金でいくらでも懐柔することができる。」という人もいたのでしょう。それら一つ一つに対して、エレミヤが答えました。「知恵ある者は自分の知恵を誇るな。つわものは自分の強さを誇るな。富む者は自分の富を誇るな。」そして、「誇る者は、ただ、これを誇れ。悟りを得て、わたしを知っていることを。」と答えます。誇りとするなら、主を知っていること、神を親密に知ることを誇りとしなさいということです。

1A 誇ってはならないこと 23

私たちは前回と同じように、自分が何によって支えられているのか、何を自分の救いとしている

のか、その安心感の置き処をテーマとしています。私たちは、それぞれ自分のこの部分は強いところだと自負している部分があると思います。ある人にとっては、自分の知性で物事を考えていくとすることでしょう。何かを悟っていく、知っていくことに安心感を見いだす人がいるかもしれません。そして、何か強いもの、力のあるものを求めていく人がいるでしょう。あるいは、お金があると安心するということかもしれません。

1B 知恵

エレミヤは、「**知恵ある者は自分の知恵を誇るな。**」と言います。すべての知恵について聖書では、主を恐れることこそが知恵の初めであることを教えています。「箴言 9:10 主を恐れることは知恵の初め、聖なる方を知ることは悟りである。」何か知恵と言われることがあるならば、主ご自身を畏れ敬うことがその始まりなのだということです。他の箴言の箇所では、「3:5-6 心を尽くして主に拠り頼め。自分の悟りにたよるな。あなたの行く所どこにおいても、主を認めよ。そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる。」と教えていますね。自分の思っていること、感じていることはあってよいのですが、それが全てではないのです。

また、自分より賢いと思っている人、自分が頼っている人から影響を受けて、それに頼っています。自然科学が万能だというのは、私たち近現代人の病ですね。私が高校生の時に、化学の先生がある方程式を教えていた時に、「これが十年後には間違いだということが、あり得るかもしれないからね。」と言いました。これが真の科学的な思考法ですね。科学は検証可能であり、変わっていくものなのです。しかし、人はどこかで安心したいと願っています。それで、科学的な知識と呼ばれるものに頼ろうとします。そして自分の体についてならば、お医者さんの言っていることは絶対だと思ってしまいます。自分の知っていることや感じていることが、それが真実で正しいと思っいるその心は、まるで深い沼のように暗いです。

このままでは、いつまでも心が不安です。いい加減、このプライド、高ぶりは捨てたほうがいいですね。つまり、自分は「絶対的に正しい方の権威が必要だ」ということです。絶対の神がおられて、この方を恐れ敬って生きる、この方が言われることならば正しいとして、自分の悟りを正しいとしないことです。この権威に服する時に私たちの心に平安が来ます。

海のような知恵と知識を持っていたソロモンが、伝道者の書で最後に言いました。「12:13-14 結局のところ、もうすべてが聞かされていることだ。神を恐れよ。神の命令を守れ。これが人間にとってすべてである。神は、善であれ悪であれ、すべての隠れたことについて、すべてのわざをさばかれるからだ。」また、こうも言っています。「新共同訳 7:29 神は人間をまっすぐに造られたが／人間は複雑な考え方をしたがる」。真っ直ぐに造られたのに、複雑に考えてしまいます。多くの理屈を求めてしまいます。真っ直ぐに考えてみましょう。ヘブル語では、真っ直ぐと正しいは同じ言葉が使われています！

神は賢いお方です。どれだけ賢いかと言いますと、この天と地にある全てのものを造られるほどの知恵を持っておられます。主は知恵に満ちた方なのですが、人がその知恵を受け入れない、人の知恵に頼ろうとするので、敢えて愚かなものを通してご自分の知恵を示されます。「1コリント人 1:21 事実、この世が自分の知恵によって神を知ることがないのは、神の知恵によるのです。それゆえ、神はみこころによって、宣教のことばの愚かさを通して、信じる者を救おうと定められたのです。」十字架のことば、キリストの十字架の言葉が私たちを救います。

2B 力

そしてエレミヤは、「**つわものは自分の強さを誇るな。**」と言っています。力があることに、安心感、救いを持っているならば、それを誇るなということです。私たちは目に見えるものによって、自分を守ろうとしています。自分がどこに属するか、20年ぐらい前であれば大企業にいることのほうが、安心だと思っています。私が大学を卒業したのは、バブルがはじけ始めたちょうどその時でしたが、周りの仲間は金融関係に就職していきました。私が早々に、運輸業関係に決まったら、「そこも、株式上場だけだね・・・」とちょっと嫌味を言われました。そこから始まりましたね、これまで不動のような大手の銀行や証券会社が次々に倒産しました。教会であっても、そうかもしれません。人々が多くいることは、主の祝福であり、それはほめたたえるべきことですが、人が多いから安心だと思ってしまう。

あるいは、制度に頼っています。制度というのは何でもあるのですが、人々が集まってこれが決まり事だとしているものを守っていく力です。家の制度は崩れてはきているものの、ものすごく強いですね。こんなしきたりに従っても意味はないと思っているけれども、そのシステムから外れたら自分が退けられてしまう、自分が守られないと思っています。その力はとても強いです。

生まれつきの盲人でイエス様から癒していただいた男のことを思い出します。それが安息日に起こったということで、ユダヤ人の宗教指導者は彼を呼び寄せます。なぜなら、イエス様が彼のためにつばきで泥を作って、それを目にぬって、それでシロアムの池で洗いなさいと言ったからです。この泥をつくって目に塗る、としてその泥を洗うという行為がすべて、安息日にははならない労働であると彼らは解釈していたからです。それで、その元盲人はイエス様のことを、「あの方は預言者です。」と言いました。盲目だったということを信じたくなかったので、彼らは両親を呼んだのです。すると両親は、「あれに聞いてください。」と言って弁解したのです。その理由を使徒ヨハネは説明しています。「ヨハネ 9:22 彼の両親がこう言ったのは、ユダヤ人たちを恐れたからであった。すでにユダヤ人たちは、イエスをキリストであると告白する者があれば、その者を会堂から追放すると決めていたからである。」

しかし、その制度は脆くも壊れます。ローマによって紀元70年にエルサレムは破壊されました。そしてエレミヤの時代も同じく、エレミヤも宗教指導者によって迫害されましたが、しかし間もなくしてバビロンによって破壊されたのです。力に頼ってはいけないと主は言われます。

3B 富

そして、「**富む者は自分の富を誇るな。**」とあります。いろいろなことが起こっても、最後は金があれば何とかなるという思いが誘惑として私たちの心にあります。けれども、実は富があっても、その富が頂点に達している時に、生活が台無しになったということは数多くあります。国について言うならば、バビロンは巨大な富を持っている時にメディア・ペルシヤによって滅ぼされました。聖書には、何度も何度も、一日にして滅んでしまう姿を書いています(イザヤ 47:9、黙示 18:8)。

聖書には、数多く富に拠り頼むことについての警告があります。金持ちとラザロの話は強烈です。この地上で金持ちであった男が死後にハデスにおいては火の中で苦しみ、乞食であったラザロが、アブラハムの懷で慰めを受けていました。そしてキリスト者に対しても、使徒パウロは警告しています。「1テモテ 6:9-10 金持ちになりたがる人たちは、誘惑とわなと、また人を滅びと破滅に投げ入れる、愚かで、有害な多くの欲とに陥ります。金銭を愛することが、あらゆる悪の根だからです。ある人たちは、金を追い求めたために、信仰から迷い出て、非常な苦痛をもって自分を刺し通しました。」そして黙示録ではイエス様が、富んでいたラオデキヤの教会に対して強く叱責しています。「3:17 あなたは、自分は富んでいる、豊かになった、乏しいものは何もないと言って、実は自分がみじめで、哀れで、貧しくて、盲目で、裸の者であることを知らない。」

私たちは、働くことが命じられています。働かない者は食べてはならないとも、聖書には書かれています(2テサロニケ 3 章)。けれども、一日一日を労して、それに感謝していくこと。その与えられた分を喜ぶこと。それ以上のものを欲してはいけなしい、主は必要を必ず満たしてくださることを信じます。

2A 主を知ること 24

では、どうすればよいのでしょうか？24 節です、「**誇る者は、ただ、これを誇れ。悟りを得て、わたしを知っていることを。**」主を知ることです。神を知ること、これを誇りとします。まず、「悟りを得る」と言っていますが、悟りを得るのは、理解するということです。これは知的な行為です。けれども、次の「**わたしを知っている**」というのは、親密に知ることを意味しています。アダムがエバを知ったという時に使われるような、知ることです。ですから、情報を知っているということではありません。学習したという意味の知ることではありません。神を知ることです。体験して、親密に知ることです。

ジョン・パイパーという牧師であり、神学者が言っていました。残念なことに、今、キリスト教会の牧師で性的な罪を犯す人が多いです。神学者でも多いような言い方をしていました。なぜ多いのか？その回答に驚きました。「神を知らないからです。」ちょっと待って！神学者こそが、また牧師こそが聖書に毎日取り組み、神を知っているはずなのです。けれども、彼は今話した、情報や知識ではなくて、人格的に、親密に知っているかどうかということでもあります。

神を知ると、神のご性質の中に歩みます。神の働きの中にいます。その知っているということが、

自分の歩み、行ないの中に表れます。「1ヨハネ 4:7-8 愛のある者はみな神から生まれ、神を知っています。愛のない者に、神はわかりません。なぜなら神は愛だからです。」神が愛であり、神を知っているなら、神を愛し、兄弟を愛します。「1ヨハネ 2:3-4 もし、私たちが神の命令を守るなら、それによって、私たちは神を知っていることがわかります。神を知っているといたしながら、その命令を守らない者は、偽り者であり、真理はその人のうちにありません。」神を知っていれば、その命令の中に留まります。知っていることが、歩みの中に現れるのです。

1B 恵み(慈愛)

そこで、「わたしは主であって、地に恵みと公義と正義を行なう者」と言われています。主は、地上でこれらのことを行なわれます。ご自分を知っている者たちを通して、これらのことを行なわれます。初めに、「恵み」です。このヘブル語は、「ヘセド」です。真実な愛、契約に基づいた誠実のことです。主が恵み深い方であり、ご自分が約束されたことを必ず守ってください、真実を尽くしてください方です。この変わらない愛、自分のことをよく思ってください方。その恵みを知ることは、私たちキリスト者の第一の務めです。「詩篇 36:5 主よ。あなたの恵みは天にあり、あなたの真実は雲にまで及びます。」天の上にあるような恵みです。これは天から来るもので、地上にはないものであり、私たちの思いをはるかに超えたものです。そしてヨハネはこう言っています。「私たちはみな、この方に満ち満ちた豊かさの中から、恵みの上にさらに恵みを受けたのである。(ヨハネ 1:16)」満ち満ちた豊かさがあります。そしてそこから恵みがあって、さらにその上に恵みが押し寄せてきます。

イエス様が恵みを示されたので有名な話は、姦淫の現場で捕えられた女です。律法学者やパリサイ人たちは、彼女を捕まえてイエス様のところに連れてきました。「ヨハネ 8:5 モーセは律法の中で、こういう女を石打ちにするように命じています。ところで、あなたは何と言われますか。」と問い質します。イエス様は身をかがめて、指で地面に書いておられるだけでした。問い続けが止まらないので、イエス様は、「あなたがたのうちで、罪のない者が、最初に彼女に石を投げなさい。」と言われました。すると年長者から一人一人いなくなって行って、女だけになりました。女に、「婦人よ。」と語りかけられます。雌豚などと、おそらくは罵られていたのではないかと思います。しかし、婦人よと相手を、人格をもった存在として呼ばれました。そして、「わたしもあなたを罪に定めません。行きなさい。今からは決して罪を犯してはなりません。(ヨハネ 8:11)」唯一、罪がなく、石を投げつけることのできる方がその罪を赦されました。

2B 公義

次に、「公義」です。公義とは、公正や公平に近い言葉です。正しく判断するということでしょう。神はえこひいきされない方です。「ローマ 2:6-11 神は、ひとりひとりに、その人の行ないに従って報いをお与えになります。忍耐をもって善を行ない、栄光と誉れと不滅のものを求める者には、永遠のいのちを与え、党派心を持ち、真理に従わないで不義に従う者には、怒りと憤りを下されるのです。患難と苦悩とは、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、悪を行なうすべての者の上を下り、栄光と誉れと平和は、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、善を行なうすべての者の上にあります。」

神にはえこひいきなどはないからです。」

神は、正しく裁いてくださる方です。全ての曲がったものを、真っ直ぐにしてくさる方です。私たちの生きている不条理な世界の中で、神の公義は希望であります。正しく裁かれていない、不公平、不正だと思われることがあっても、主が裁いてくださいます。ですから、私たちはこの方を知る時に、心を平安にすることができます。自分の手で仕返しをしなくてよい、いつまでも恨んでいなくてよい、主が必ず裁いてくださるのだからと、この方に判断を全てお任せすることができるのです。

3B 正義

そして、「正義」です。これは、基準です。公義が正しい判断であれば、正義は正しい基準です。この方こそが正義であり、この方を知れば、真実と正義を行なうことができます。パウロは、新しく生まれたことについて、次のように変化したことを教えています。「エペソ 4:22-24 その教えとは、あなたがたの以前の生活について言うならば、人を欺く情欲によって滅びて行く古い人を脱ぎ捨てるべきこと、またあなたがたが心の霊において新しくされ、真理に基づく義と聖をもって神にかたどり造り出された、新しい人を身に着るべきことでした。」私たちが、義と聖をもって神にかたどり造り出された新しい人、その性質があります。ですから、嘘をつくのではなく真実を語ります。怒っても、憤ったままにしません。盗むのではなく、労苦して働いて施します。悪いことばを一切語らず、むしろ人の徳に役立つ言葉を、恵みの言葉を語ります。聖霊を悲しませないように、悪意、無慈悲、怒りを一切捨てて、互いに親切にして、心優しい人となり、互いに赦し合います。

エレミヤは、主を知るとのこと以外の他に何でもした人々の中に住んでいました。恵みではなく無慈悲、公義ではなく不正、正義ではなく不義の中にいた時に、主は後に慰めとして、イエス・キリストの幻の預言を下されます。「23:5-6 見よ。その日が来る。…主の御告げ。…その日、わたしは、ダビデに一つの正しい若枝を起す。彼は王となって治め、栄えて、この国に公義と正義を行なう。その日、ユダは救われ、イスラエルは安らかに住む。その王の名は、『主は私たちの正義。』と呼ばれよう。」ダビデの家系から現れる方、若枝のように目立たないところから出て来られますが、この方は公義と正義を行なわれる方です。そして、「主は私たちの正義。」主ご自身が正義となってくさる、私たちの正義となってくさります。すると、主が安らぎを与えられます。心を平和にすることができます。ぜひ恵みの中に生きましょう、公義の中に生きましょう、正義の中に留まりましょう。それこそが、私たちの誇るべきことです。

ある人が、現代は「感情が神のように絶対に正しいと考える傾向がある。」と言っています。「教師や上司の指導にとりあえず従っているフリをしていても、腹の中では自分の方が絶対に正しいと考えているようなときは、感情に支配されていると考えてまず間違いない。」だそうです。上の権威がなくなったからですね、頑固おやじのような権威がないために、感情が押さえ付けられることはなくなりました。けれども、何に拠り頼めがよいかといいますと、自分の感じていること、思っていることが頼りなのです。けれども問題は、「自分の感情が絶対に正しいとする基準はどこにも存在しない。」ということです。その感じ方は人それぞれであり、どれ一つとして同じものはありません。だから、「自分の感情に固執して周囲から孤立」していくようになります。それぞれが別のことを感じていて、それが正しいと思っているから、付き合うことができなくなってしまうのです。¹

I. When they were told how inevitable the judgment would be they pleaded the defence of their politics and powers, which, with the help of their wealth and treasure, they thought made their city impregnable. In answer to this he shows them the folly of trusting to and boasting of all these stays, while they have not a God in covenant to stay themselves upon, v. 23, 24. Here he shows, 1. What we may not depend upon in a day of distress: *Let not the wise man glory in his wisdom*, as if with the help of that he could outwit or countermined the enemy, or in the greatest extremity find out some evasion or other; for a man's wisdom may fail him when he needs it most, and he may fail him when he needs it most, and he may be taken in his own craftiness. **Ahithophel** was befooled, and counsellors are often *led away spoiled*. But, if a man's policies fail him, yet surely he may gain his point by might and dint of courage. No: *Let not the strong man glory in his strength*, for the battle is not always to the strong. **David the stripling** proves too hard for Goliath the giant. All human force is nothing without God, worse than nothing against him. But may not the *rich man's wealth be his strong city?* (money answers all things) No: *Let not the rich man glory in his riches*, for they may prove so far from sheltering him that they may expose him and make him the fairer mark. Let not the people boast of the *wise men, and mighty men, and rich men* that they have among them, as if they could make their part good against the Chaldeans because they have wise men to advise concerning the war, mighty men to fight their battles, and rich men to bear the charges of the war. Let not particular persons think to escape the common calamity by their wisdom, might, or money; for all these will prove but *vain things for safety*. 2. He shows what we may depend upon in a day of distress. (1.) Our only comfort in trouble will be that we have done our duty. Those that *refused to know God* (v. 6) will boast in vain of their wisdom and wealth; but those that *know God*, intelligently, that *understand aright that he*

¹ <http://www.logos-ministries.org/blog/?p=7171>

is the Lord, that have not only right apprehensions concerning his nature, and attributes, and relations to man, but receive and retain the impressions of them, may *glory in this* it will be their rejoicing in the day of evil. (2.) Our only confidence in trouble will be that, having through grace in some measure done our duty, we shall find God a God all-sufficient to us. We may *glory in this*, that, wherever we are, we have an acquaintance with an interest in a God that *exercises lovingkindness, and judgment, and righteousness in the earth*, that is not only just to all his creatures and will do no wrong to any of them, but kind to all his children and will protect them and provide for them. *For in these things I delight*. God delights to show kindness and to execute judgment himself, and is pleased with those who herein are *followers of him as dear children*. Those that have such knowledge of the glory of God as to be changed into the same image, and to partake of his holiness, find it to be their perfection and glory; and the God they thus faithfully conform to they may cheerfully confide in, in their greatest straits. But the prophet intimates that the generality of this people took no care about this. Their wisdom, and might, and riches, were their joy and hope, which would end in grief and despair. But those few among them that had the knowledge of God might please themselves with it, and boast themselves of it; it would stand them in better stead than *thousands of gold and silver*.²

² Henry, M. (1994). *Matthew Henry's commentary on the whole Bible: complete and unabridged in one volume* (p. 1244). Peabody: Hendrickson.